

永満寺桜馬場遺跡

福岡県直方市大字永満寺所在遺跡の調査

福岡県文化財調査報告書 第247集

2014

九州歴史資料館

序 文

福岡県直方市は、かつては「筑豊」の主要な一都市として、石炭産業が栄えました。しかし、遡れば、筑前黒田藩の支藩東蓮寺藩が置かれた城下町であり、長崎街道が通る交通の要衝でもありました。

市街地の東に聳える鷹取山には、中世に築城され、黒田藩によって再建された鷹取城跡があり、その山麓で焼かれた焼き物が遠州七窯の一つ高取焼です。

本書で報告する永満寺桜馬場遺跡は、その鷹取山の西麓に位置する遺跡で、発掘調査では古代に栄えたと伝えられる永満寺、そして近世鷹取城の城下と思われる遺構・遺物が出土しました。今回の調査面積は狭小でしたが、周辺での今後の発掘調査が大いに期待されるところです。

本書が、地域のみならず広範に歴史資料として活用され、また教育・研究、文化財愛護思想の普及の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書作成にいたる間には、福岡県県土整備部直方県土整備事務所および直方市・同教育委員会、そして永満寺地区をはじめとする地元有志の方々の御協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

平成26年3月31日

九州歴史資料館
館長 荒巻 俊彦

例　言

1. 本書は、永満寺川右支川砂防路工事に伴って発掘調査を実施した、福岡県直方市大字永満寺に所在する遺跡の発掘調査の記録である。
2. 発掘調査・報告書作製は、福岡県県土整備部直方県土整備事務所からの執行委任を受けて、九州歴史資料館が実施した。
なお、調査・報告書作製に関して直方市・同教育委員会及び地元永満寺区の多大な御協力を得た。
3. 本書に掲載した写真は、遺構は調査担当者が、遺物は九州歴史資料館整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。
なお、空中写真は九州航空株式会社及び東亜航空技研株式会社に委託して、ラジコンヘリ等を使用して撮影したものである。
4. 本書に掲載した遺構図は、発掘作業員の補助を得て、調査担当者が作成した。
5. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館において、城門の指導の下で実施した。
6. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。
7. 本書に使用した地図は国土地理院発行の1/50,000地形図「直方・行橋」を改変したものである。
方位は磁北である。また、使用する座標は世界測地系による。
8. 本書の執筆・編集は飛野が行った。

目　次

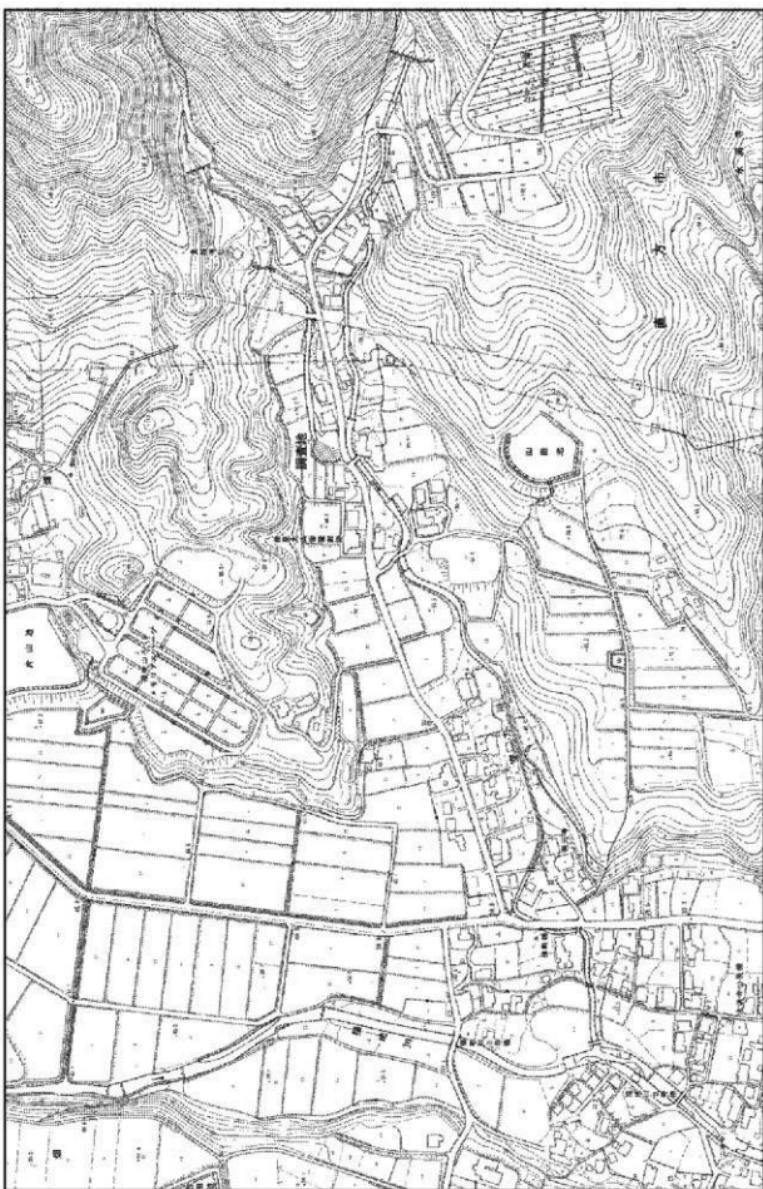
I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の内容	9
IV. おわりに	21

図版目次

- | | | |
|------|---|------------------|
| 図版1 | 1. 鷹取城跡上空から西麓を見る(東から)
3. 遺跡遠景(西上空から) | 2. 遺跡遠景(北西上空から) |
| 図版2 | 1. 遺跡全景(上空から)
3. 1Tr.北拡張区東壁(北西から) | 2. 1Tr.東壁(南西から) |
| 図版3 | 1. 2Tr.南壁(北東から)
3. 石列全景(北から) | 2. 調査区全景(東から) |
| 図版4 | 1. 石列南辺及び石組溝(東から)
3. 石列南西隅付近(南東から) | 2. 石列北辺(東から) |
| 図版5 | 1. 石列西辺と黄褐色土(北から)
3. 石組溝と石列南辺(西から) | 2. 3ETr.西壁(北東から) |
| 図版6 | 1. 石列南辺(東から)
3. 石組溝の堆積状況(西から) | 2. 石組溝(東から) |
| 図版7 | 1. 石列南西隅の張り出しと鍛冶炉(東から)
3. 鍛冶炉完掘後(北東から) | 2. 鍛冶炉(南西から) |
| 図版8 | 1. 土坑(北から)
3. 石敷状遺構(北東から) | 2. 土坑完掘後(北から) |
| 図版9 | 出土遺物1 | |
| 図版10 | 出土遺物2 | |

挿図目次

第1図	周辺地形図 (1/5,000)	iv
第2図	永満寺桜馬場遺跡の位置	1
第3図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	4
第4図	遺構配置図 (1/100)	折込
第5図	土層実測図 (1/60)	9
第6図	南側石列実測図 (1/60)	10
第7図	北側石列実測図 (1/60)	11
第8図	鍛冶炉・土坑実測図 (1/30)	12
第9図	石敷状遺構実測図 (1/60)	13
第10図	出土遺物実測図1 (1Tr.とその周辺、1/3)	14
第11図	出土遺物実測図2 (2Tr.とその周辺、1/3)	15
第12図	出土遺物実測図3 (石列周辺黄褐色土、1/3)	16
第13図	出土遺物実測図4 (石組溝、1/3)	17
第14図	出土遺物実測図5 (その他の出土遺物、1/3)	18
第15図	出土遺物実測図6 (硯・銅錢、1/3・1/1)	19
第16図	出土遺物実測図7 (瓦、1/3)	20
第17図	出土遺物実測図8 (鉄滓、1/2)	20



I はじめに

1 調査に至る経緯

平成24年4月9日、福岡県県土整備部直方市県土整備事務所より直方市教育委員会に対して、市内大字永満寺910-5において砂防路工事を実施する計画があり、当地の埋蔵文化財の有無を確認するよう試掘調査依頼が提出された。これを受けて同教育委員会教育総務課文化財担当が同年4月20日に試掘調査を行ったところ、中世のものと見られる土器器片が出土し、遺物包含層の存在を確認したことから工事着手前に発掘調査を実施するように指示を行った。

直方市教育委員会では、従来から市内の埋蔵文化財保護については独自に対応してきた。しかし、当該年度は民間から受託した報告書作成業務が多忙で、新たな事業の受け入れは厳しい状況にあり、調査主体に関して福岡県教育庁総務部文化財保護課企画係と協議を繰り返していた。結果的には、県教育委員会が調査主体となるということで協議が整い、九州歴史資料館文化財調査室が調査を担当することとなった。事務手続きを経て平成24年9月4日から重機を使用しての表土掘削を開始、同11日から作業員を投入した。

調査対象地は中近世山城として名高い鷹取山の西麓、東から西に延びる丘陵に挟まれた小さな谷の中央に広大な靈園へ続く一本の坂道があり、その両側に住宅が点在する静かな環境にある。立地環境や狹小な調査面積などからみて、調査には時間を要しないだろうと安易に考えていた。しかし、表土掘削の初日に、今回の工事対象である小河川の際で龍泉窯系割花文青磁碗の大型片を採集した。川縁の一段高くなった部分の表土上、大小の礫がむき出しえた草むらにあったことから、他所から持ち込んだ客土に混入していたものであろうと推測した。ところが、調査着手後、最初に掘削したトレッセで0.8mほどの客土がなされていることが判明、しかもその最下層近くで龍泉窯系「金玉満堂」青磁碗の底部が出土したことから、先の割花文碗は偶然もたらされたものではなく、この地に包蔵されていたものである可能性が高いと考えに至った。また、表土掘削後にわずかに見えていた石列が調査区全体に広がりをもつ基壇状遺構となるなど、当初の予想を大きく上回る内容をもつ遺跡であった。加えて、基壇状遺構南辺を再利用して作られた石組溝の内部には大小の礫が堆積していて、ツルハシを用いての発掘となつた。結局、作業員を追加募集し、調査費の増額変更を行つて、発掘調査を終了したのは11月7日であった。



第2図 永満寺桜馬場遺跡の位置



工事竣工後

2 調査の組織と関係者

本報告に掲載した各遺跡の発掘調査・報告書作成に至る間の福岡県教育委員会の関係者は以下の通り。

	24年度	25年度
福岡県教育委員会		
総括		
教育長	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	荒巻俊彦	城戸秀明
総務部長	西牟田龍治	西牟田龍治
文化財保護課長	伊崎俊秋	伊崎俊秋
企画係長	吉田東明	吉田東明
企画係技術主査	宮地聰一郎	
企画係主任技師		大庭孝夫
九州歴史資料館		
総括		
館長	西谷 正	荒巻俊彦
副館長	篠田隆行	篠田隆行
企画主幹（総務室長）	圓城寺紀子	圓城寺紀子
参考事（文化財調査室長）		飛野博文
企画主幹（文化財調査室長）	飛野博文	（調査担当）
企画主幹（文化財調査室長補佐）	吉村靖徳	吉村靖徳
技術主査（文化財調査班長）	小川泰樹	小川泰樹
庶務		
企画主査	長野良博	長野良博
事務主査	青木三保	青木三保
		南里成子
主任主事	近藤一崇	
主事	谷川賢治	三好洸一
調査・整理報告		
技術主査（保存管理班長）	加藤和歲	加藤和歲
同参考事補佐	小池史哲	池邊元明
主任技師		城門義廣
技師	小林 啓	小林 啓

なお、発掘調査に当たっては地元在住の方々をはじめ、調査に参加された方々、直方市・同教育委員会、福岡県直方県土整備事務所、工事関係者などのご理解・ご協力を得て無事に終えることができました。改めて感謝申し上げます。

II 位置と環境

福岡県直方市は九州北東端の政令市である北九州市の南西に接する位置にあり、一級河川遠賀川は直方市内で英彦山川・犬鳴川などが合流して大河となる。石炭産業が盛んな頃は上流の田川・飯塚地区と下流の若松港を結ぶ水運が大いに賑わい、洗炭のために川水が黒くなっていたというが、近年では鮭が遡上することが話題になるほどに水質が改善している。

また、JR筑豊線・筑豊電気鉄道でJR鹿児島本線に接続し、北九州都市高速道路と接続する九州縦貫自動車道八幡ICが市域に近いなど交通の便がよいこともあって、北九州市のベッドタウン化が進んでいる。平成25年6月段階の人口数は58,000人余りである。

地形的には東に標高900mの福智山を主峰とする山塊が聳え、西には標高340mほどの六ヶ岳に連なる山塊がほぼ南北方向に伸びていて、その間を遠賀川が北流する。遠賀川と犬鳴川に挟まれた丘陵とその周辺が現在の中心市街地で、ここに江戸時代に福岡藩支藩の東蓮寺藩が置かれた。遠賀川右岸では福智山山塊から派生する丘陵が幾本か伸びていて、その上に弥生時代以来の各時代の遺跡が所在する。

今回報告する遺跡は古代以降に属することから、以下では現直方市を中心とする古代以降の歴史的環境を概観したい。

直方市は市制施行以前は鞍手郡に属していた。『和名抄』は鞍手郡に金生・二田・生見・十市・新分・粥田の6郷を記す。現在に遺称を残す地名もあるが、それらの厳密な比定は困難である。ただ、粥田の地名は後に筑農地方最大の莊園といわれる「粥田莊」に引き継がれたといわれている。粥田莊は宮若市東部の本城を中心としたやすく、この永満寺地区も含まれていた。平安末期、藤原氏一門で在地の有力武士であった粥田経達は現在の嘉穂郡・鞍手郡に千町に及ぶ土地を持っていたといわれ、その一部を京都六勝寺の一つ延勝寺に寄進した。成勝寺領であった粥田莊の立券もその頃（保元元年、1156）であろうといわれている。粥田氏は、北部九州の有力武士団であり平家与力でもあった大蔵系原田氏とも姻戚関係にあって、平家の滅亡とともに勢力を失う。やがて、粥田莊は貞応3年（1224）、北条政子によって高野山金剛三昧院へ寄進され、紆余曲折を経て戦国時代まで遠賀・鞍手・嘉麻三郡にわたる大規模な莊園が維持された。

さて、粥田経達に先立つ天永元年（1110）及び永久3年（1115）銘のある経筒が「永満寺址と称する付近の土中から」発見されたのは昭和5年のことであった。「川から礫石太さ拳大の石が数百個積まれた所」の前面で「経筒の陶製が3個・青銅製3個・鏡2面・陶筒3本・軸木に製本の附着して塊状のものの1個・粗製の土筒2（1個は蓋あり）その他破片若干」が発掘された。そこから数十歩の所の「千石岩」と呼ぶ巨石の前でも「青銅製経筒6個・土筒2個・刀子の完全なるもの3本・鏡の破片1面・軸木の完全なもの1本・その他鉄片・土器の破片等・若干」が発掘された（東博藏）。後者の経筒の一つには、

豊前国田川郡

託摩御山住僧

永久三年 乙未

一月六日

勸進僧教□



1. 永満寺桜馬場遺跡 2. 惣用遺跡 3. 木屋瀬東構口 4. 木屋瀬本陣・脇本陣跡 5. 木屋瀬西構口
6. 天神橋貝塚 7. 八竜古墳 8. 感田栗林横穴墓群 9. 感田経塚 10. 小野牟田横穴墓群 11. 山ノ田城跡
12. 雲取城跡 13. 内ヶ磯窓跡 14. 広江経塚 15. 羽高横穴墓群 16. 羽高東横穴墓群 17. 箕尾遺跡
18. 鷹取城跡 19. 和田遺跡 20. 高山田遺跡 21. 下境向峯遺跡 22. 光福寺遺跡 23. 上境前屋敷遺跡
24. 福地神社境内古墳群 25. 万五郎横穴墓群 26. 水町遺跡群 27. 永満寺経塚 28. 永満寺宅間窓跡
29. 皿山本窓跡 30. 鍋木田古墳・横穴墓群 31. 牟田横穴墓群

の銘文があった。このうち「託摩」は現在も大字永満寺に「宅間」として遺称が残るが、現在は田川郡の北に隣接する旧「筑前国鞍手郡」に属する。そもそも「永満寺村」は江戸時代明暦年間（1655～1657）に「上境村」から分かれたものであり、上境村について以下のような記録がある。

『直方市史』上巻、1971

建久2年（1191）	「豊前国堺御庄往生院院主春宗…」	〔志賀文書〕
応永15年（1408）	「豊前国田河郡堺郷事…」	〔金剛三昧院文書〕
応仁3年（1469）	「堺郷田所正阿が豊前国田河郡堺郷の名田を書き上げる」	〔志賀文書〕
〔角川日本地名大辞典〕40 福岡県、1988		
永仁元年（1293）	「筑前粥田莊預所用米目録案」の中に堺郷がある	〔金剛三昧院文書〕
建武元年（1334）	「筑前国粥田莊堺郷鎮守祇園社大宮司職…」	〔筑前須賀神社文書〕
文明7年（1475）	「筑前国粥田庄十三箇郷内堺郷事…」	〔金剛三昧院文書〕
天文8年（1539）	「筑前国粥田之庄境堺郷大興山永満寺双林院…」	〔双林院文書〕

これらを見ると、『角川日本地名大辞典』に引用した文書はすべて郡名を冠していない。粥田庄自体が筑前国遠賀・鞍手・嘉麻郡にまたがる大規模な莊園だったからであろう。従って、ここでは境郷がどの国郡に属しているかではなく、粥田莊の領域であったという事実を記しているだけである。『直方市史』に引用する文献はすべて田河郡境郷と明記してあることから、境郷は粥田莊支配下にあった現田川郡内の郷ということであろう。境郷はその後何らかの理由で鞍手郡に編入され、現在の直方市上境・下境に比定されている。

さて、現在に地名を留める永満寺である。江戸時代黒田藩の地誌である『筑前国続風土記』（貝原益軒、18世紀前半）・『筑前国続風土記拾遺』（青柳種信、19世紀前半）を以下に引用する。

・永満寺天台宗 大興山往生院と号す。後改めて双林院と云、此寺有故に、村の名をも永満寺と号す。元は上境村に属せり、開基の時代は詳ならず、比叡山の末寺也、鷹取山のふもとにあり、天文8年大内家より9反の寺領を寄附せられし寄進状あり、凡此村山中閑寂の地にして、世俗の塵埃をはなる。此寺元禄11年直方へうつさる。直方の先君黒田之勝より寺領10石寄附し給ふ。（『筑前国続風土記』）

・永満寺址 本堂と云所に在高島の古城山の西南の麓也今林中に大日堂及貴船社有又是より西1町余村の東畔に石壁存せる所有是高島の城有りし時の城主の居館なりしか毛利氏退散の後永満寺を爰に遷せり（双林院也）今田となりて寺屋敷と云古墓多しこの寺有りし故村名をも永満寺と云。（一部略）元禄十一年此地より直方に遷されて今にかしこに在りて双林院是也寺址の水田は今に至て此寺の所有也（『筑前国続風土記拾遺』）

ここで云う貴船社は調査地の東約250mに位置する。ただ、先の経筒出土土地点は貴船神社から南東1.3kmの地点にあって、永満寺がこの山麓に広く展開していたことが推測できる。

今一つ、この遺跡に関わりが深いと思われる遺跡が鷹取城である。『直方市史』から引用する。

・長暦3年（1039）、長谷川兵部卿吉武が平直方・中原成道を討伐、褒美として豊前国6万石を賜り、永承元年（1046）に鷹取に築城。この時、家老弁城永井因幡守宗久は永満寺叢林院の鉄嵐に命じて…（『正蓮寺先祖記』）

・大宰小式頼尚者田原藤太秀郷14代大宰小式貞経入道妙恵ノ嫡男也、豊前田川郡高島居城

小式頼尚築城開始トス（『古城伝記』）

・貞和元年（1345）、小式頼尚が築城、末子式部小輔頼直を置く。貞和元年（1345）より筑紫上総介入道統種下野守種遠ノ男が在城（『豊前古城記』）

・永正元年（1504）、大友宗麟が毛利鎮実の守る鷹取城を攻め、毛利は大友に降る。

（『宗像軍記』、ただし、大友宗麟は享禄3年（1530）－天正15年（1587）なので、『軍記』か『市史』いずれかの間違いだろう。）

・天文11年（1542）、「大友義統とその惣宗麟」が大内家臣毛利鎮実が守る鷹取城を攻めた。これより毛利は大友家臣となり、永禄（1558～）の頃から嘉麻郡馬見の城代を兼ねるようになった。（『筑前要領大友戦記』、これも原典か『市史』の間違いであろう。義統が宗麟の慄である。しかも、宗麟は12歳に過ぎない。）

・天正14年（1586）、大友側の筑紫氏が城主となるが、島津氏の攻撃により落城。

島津氏の北部九州への侵攻にさらされた大友氏の要請によって豊臣秀吉の九州征伐が始まり、秀吉によって筑前は小早川秀秋に与えられた。後、黒田長政が閑ヶ原の合戦で軍功を挙げ、豊前中津から筑前福岡藩に入部したのは慶長5年（1600）年である。

黒田氏はその跡を襲って豊前にに入った細川氏を警戒して、豊前国との境界を中心にいわゆる六端城を築いた。北から若松城・黒崎城（現北九州市）、鷹取城（直方市）、益富城（嘉麻市）、松尾城（東峰村）、左右良城（朝倉市）である。鷹取城主には名槍「日本号」を福島正則から飲みとったことで知られる母里太兵衛が18,000石で就いた。その後、元和元年（1615）の一国一城令で廢城となる。

鷹取城が廃棄されて後、元和9年（1623）には黒田長政の4男高政が4万石を分知されて支藩東蓮寺藩が成立した。東蓮寺藩は3代藩主が本藩の4代藩主となつたために一旦途絶えるが、最終的には享保5年（1720）まで4代が続いて嗣子がなく廃藩となつた。

これ以後長崎街道を引き込んで水陸交通の要衝に位置する在郷町として栄えた。

また、直方市は遠州七窯として知られる高取焼発祥の地でもある。その歴史を略記する（『福岡県史 文化資料編 筑前高取焼』1992）。

文禄元（1592）八山夫婦および一子、渡海し、筑前に来る。

慶長5（1600）12月、黒田長政豊前中津から筑前へ移封。

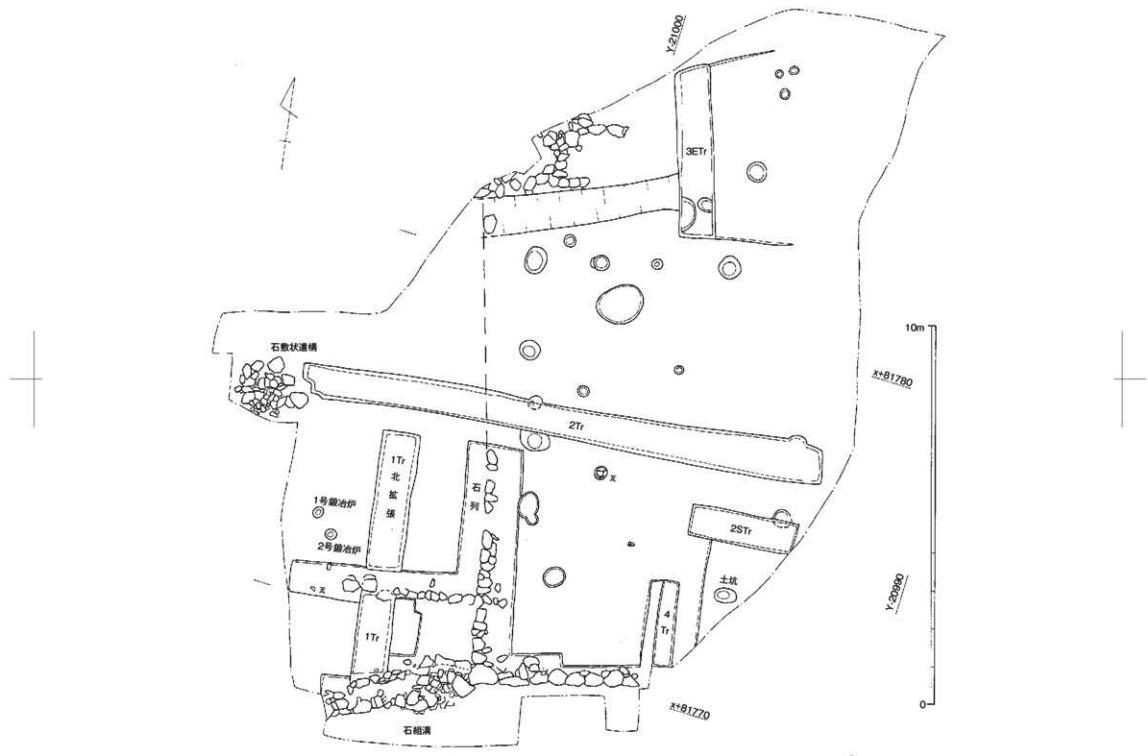
慶長7（1602）この頃、永満寺宅間窯開窯か。八山、「高取八藏」の名を賜る。『直方市史』では慶長5年に「鞍手郡永満寺村宅間にて製陶を始め…」とある。

慶長19（1614）内ヶ磯窯開窯

元和元（1615）一国一城令発令。

寛永元（1624）八山帰国を願い出て黒田忠之の勘気に触れて嘉麻郡山田村に蟄居。山田窯開窯。

その後、高取宗家は白旗山窯（現飯塚市）、小石原鼓窯（現東峰村）、福岡市へ移り現在に至る。高取焼は高級茶器、その流れを引く小石原焼は民陶として現在も栄えている。



第4図 遺構配置図(1/100)

III 調査の内容

1 調査の概要

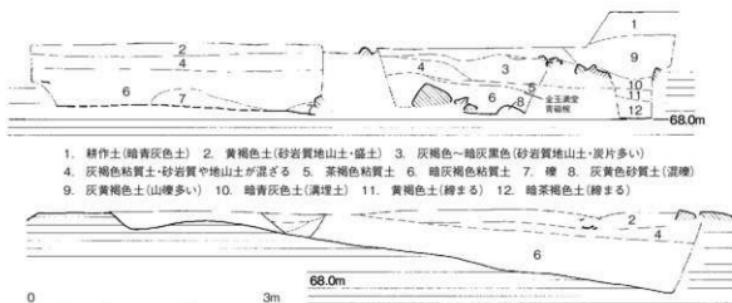
調査対象地は、現状では荒れていて建設資材などが置かれていたが、以前は水田として使用されていた。表土掘削の際、本来は地形的に低位となる西端付近で黄褐色の「地山」と誤認した非常にきれいな層が現れたため、これを指標として掘削範囲を広げて行った。本来、高位となる東側は濁った暗灰色系の石原であったことから、これは攪乱を受けているあるいは「地山」下層が既に露出しているのであろうと思われた。確かに、セメント片などが埋まっていたりして、資材置き場として使用する際に掘削が行われたこともあったようである。

黄褐色の「地山」の中に礎石状の石材が見えたことから、その南に接して南北方向のトレンチを設定した（1Tr）。そこでは掘削面から0.8mほど下位で漸く本来の地山を確認し、統一して調査区中央付近を東西に横断する2Trを設定して、全体の堆積状況の把握を試みた。

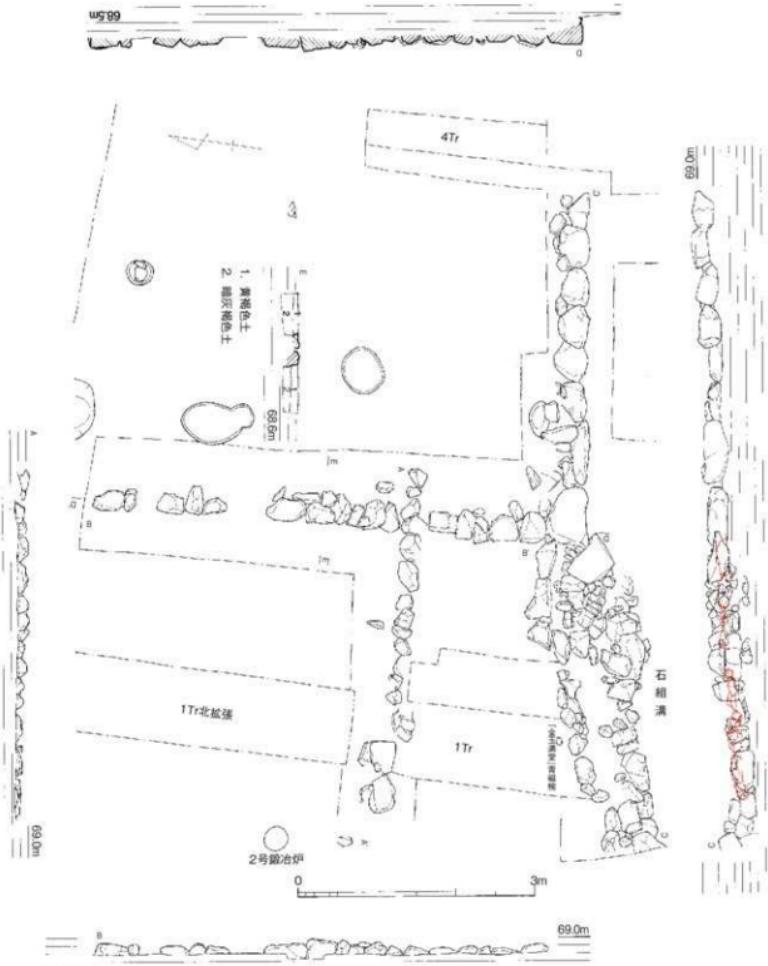
1 Tr(図版2、第5図)では最上層に風化した砂岩を用いた黄褐色土が0.1mほどの厚さで乗っていて、その下に炭片が多く含む灰褐色～灰黑色土、その下位に灰褐色粘質土と風化砂岩のブロックが混ざる層がある。ただ、この2層はレベル的にはほぼ水平であった。そのさらに下に薄く茶褐色粘質土が入り、最下層に暗灰褐色粘質土が0.4mほどの厚さで堆積していた。地山は大小の礫を交えた灰黄色砂質土である。なお、龍泉窯系「金玉満堂」青磁碗は最下層の上端付近から出土した。

東西方向に開けた2Tr(図版3、第5図)の東端は礫が多く露出していて、地山が現れているものと判断された。大きく3層に分けた客土の中、最下層は西に向かって緩やかな勾配を持つが、中層上面はほぼ水平な面を作っていて、ここでも1Trと同様に黄褐色土の下面は既に水平となっている。

このように、南北・東西両方向のトレンチ土層で黄褐色土の下面が既に水平に造成されていることから、黄褐色土が最終的な客土であり、いわゆる「舗装」あるいは「化粧」のような効果を企図して置かれたものと考えてよからう。風化砂岩を使用していることから排水に適していたと思われ、かつ非常に鮮やかな色相でもある。



第5図 土層実測図 (1/60)



第6図 南側石列実測図(1/60)

2 遺構

石列 (図版2~7、第6・7図)

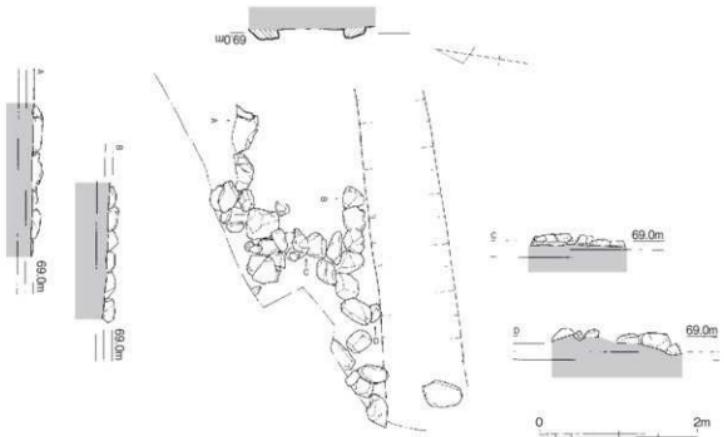
ITrを設定するきっかけは、一辺0.4mほどの大きさの上部が平坦となる礎石状の石材が表土掘削で現れたことによる。また、石列を構成する石材は黄褐色土に埋もれていて、いくつかは頂部がわずかに覗いていた。南辺の石列もやはり一部が表土掘削の段階で現れていた。

結果的に、石列は中央部を破壊されているが南北13mほどの規模をもっていた。東西方向は南辺で4.5m、北辺で2.8mほどを検出したが、南辺はさらに調査区外の東へ続く。頂部は南・西辺とともに標高68.9mでほぼ揃い、北辺は同69.0~69.1mであった。北辺は残りが悪いながら南辺と平行する位置にあるといつてよいが、西辺は南辺と直角に近いがわずかに東へ振れている。

南辺と西・北辺では石材が異なっていて、南辺がより大型の石材を用いている。これは現在の市道が当時から道として使用されていて、通行人に対して見栄えをよくしたものであろう。一方、西辺及び北辺の石材は小振りで、形状が不整なものも使用されている。南辺を見る限りではいかにも「基壇」といえそうだが、他の辺は小蝶を基本的に一列並べただけで、仕切り石といった程度であろうか。南辺を除けば石列を積み上げたとは考えがたい。

調査区南東隅で石列南側の堆積を確認したところ、上面まで小蝶を多く含む灰黄褐色土が堆積していて、これは後述する石組溝で厚く堆積していたものと同じである。ここには青灰色土層はみられなかった。

南西隅張り出し 石列の南西隅から北へ2mほどの所に西へ張り出す石列がある。長さは3.1mほどで、石材は西辺のそれよりもまた一回り小振りとなっている。また、この張り出しが南辺とはわずかに角度が振れていて平行とはならず、西辺とは直交している。なお、第6図に示した西端の2個の石材が最初に見つかった礎石状の石材、3番目の石材は大部分が地中にあって頂部がわずかに露出するもので、この3点は石列を構成する他の石材と大きさが異なる。



第7図 北側石列実測図 (1/60)

この石列は北に面を向けていると判断された。また、基壇状石列南西隅の大型石材のすぐ北に接する位置から西へや大きい石材が3個、南向きに面をそろえて並んでいる。これが西へ張り出す上記の石列に対応するものと思われ、その場合は外側で測って2.0mの幅となる。石列内部への出入口の痕跡を示しているものであろう。

北西隅張り出し 北辺のすぐ南に耕作に伴うと思われる新しい溝—埋土にビニール片を噛むーがあって、かつ石列西端の調査区境付近に乱雑に検出された石材はいずれも原位置を保っていないと見受けられたため、北西隅そのものは確認できていない。

北辺にはそれぞれ長さが2mに満たない短い石列が2列残存していて、その北面同士の間は1.4mを隔てる。調査区南端の石列から北へ延びて、隅が乱れているが東へ曲がっていたようである。また、調査区境にあるために確定したものではないが、北側の列は西へ延びていないようで、南辺に対応する北辺は南側の列と考えた方がよいのであろう。ただ、石材は北側のほうより大振りである点で課題は残る。

石組溝(図版4~6、第6図)

調査区南辺に沿って石組溝が作られている。下位に耕作土のような暗青灰色土が、その上部に大小の礫が多く混ざった黄味帯びる灰褐色土が厚く堆積して埋没していたが、最上層は再び耕作土であった。大小の礫が混ざった堆積層は土石流のような現象で埋没したことを示しているのであろう。下位の青灰色土のさらに下には締まった黄褐色土、締まった暗茶褐色土があつて、1Tr床面と同じ標高で地山と思われる山石からなる礫層が現れた。したがって、下位の2層は1Trの下位の2層に対応する可能性がある。溝中の黄褐色土は還元作用で変色したものであろう。

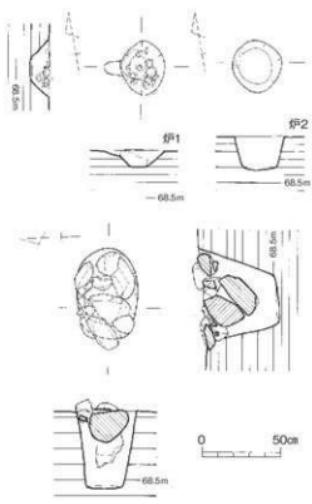
さて、石組溝は先の石列南辺に連続していて、東半の石列(石列南辺)は整然としているが、西半は乱れ、かつ二段になっているように見える。当初、西半だけが壊れ、後に再構築されたものであろうと考えていたが、乱れの始まりが北へ延びる石列の起点から西側ということに気付いた。すなわち、大型石材を用いた石列南辺を利用して、それ以西に石組溝を継ぎ足したものと考えられる。石列は大型石材を一段据えただけの簡略な構造であって壊れないが、石組溝は特に東端付近で小礫を多用していて乱れたのであろう。

一見して二段に見える北側の乱れた礫群は、溝を構成する礫に比して小振りの傾向が窺える。本来石列南西隅張り出しの南辺に使用されたものが、何らかの理由で動いた可能性が考えられる。

ただ、初期の溝が水路として使用されたとするには、砂層や礫層が確認できていないので、別の意味を考える必要があるのかも知れない。

鍛冶炉(図版7、第8図)

調査区南西隅付近、石列南西隅張り出しの先端北側に位置する。1号炉は直径0.3m弱~0.35mの偏円形平面とな



第8図 鍛冶炉・土坑実測図(1/30)

り、深さは0.1mほどである。西側に幅0.1m、長さ0.1mの舌状の張り出しがあって床がカーブを描くことから輪羽口を置いた痕跡であると考えている。床面は0.1~0.15mほどの長方形に近い形状となり、舌状張り出しがとりつく付近の壁・床が特に白色化していた。埋土は周囲の表層を覆う黄褐色土と炭の混在したもので、純粹な炭層はみられなかつた。また、内部から数点の小蝶とかなりの量の鉄滓小塊が出土し、その総重量は970gである。

2号炉は1号炉の南東にあって、0.3mの距離を隔てる。直径0.3m前後のほぼ円形の平面プランとなり、深さは0.2mほどであった。これは断面が円筒状になり、1号炉同様の埋土であったが、鉄滓はわずか1個、重量は113.3gである。焼けた面も見えず、壊れた炉壁のような焼土が表層でわずかに見られただけである。

土 坑(図版8、第8図)

調査区南東隅に位置する。長さ0.6m、幅0.4mの長円形に近い平面形となり、深さは0.5mほどであった。上層に礫がつまり、埋土中に若干の焼土塊が入っていたが、出土遺物はない。なお、礫の上には調査区西半で見られた黄褐色土が覆っていた。

石敷状遺構(図版8、第9図)

2Tr西端付近で検出した。検出した範囲は1.6×2.0mほどであるが、南西部は調査区外となつていて、今少し広がるのであろう。石敷状遺構としたが、図・写真で見るよう整然と敷き詰めたものではなく、乱雑に置かれたといった趣であり、遺構と呼ぶには相応しくないのかも知れない。

3 出土遺物

遺物のほとんどは包含層出土であり、以下、出土地点あるいは層位に沿つて記述する。

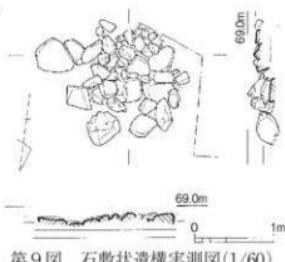
表採遺物(第10図1)

2Tr西端の北側、表土掘削をしていないところで採集した龍泉窯系割花文碗で、暗灰色緻密な胎土に透明な深緑色釉を掛けている。

1Tr及び北拡張Tr出土遺物(図版9、第10図2~9)

2・3は1Tr最下層出土。2は陶器摺鉢小片。微砂粒を含むが胎土は精良といつてよく、器肉・器表ともに明るいくすんだ赤色となるが、突帯から口縁部外面までの灰褐色となる。摺目は1条の幅が広く、不連続に施される。田村氏のいう高取焼I-1類にあたる。3は龍泉窯系青磁碗で、見込みに「金玉滿堂」のスタンプが押されるが、不明瞭となっている。灰白色緻密な胎土に明灰黄緑色に発色する透明度の低い釉を施すが、被熱のためか半ばほどが灰青色となっている。

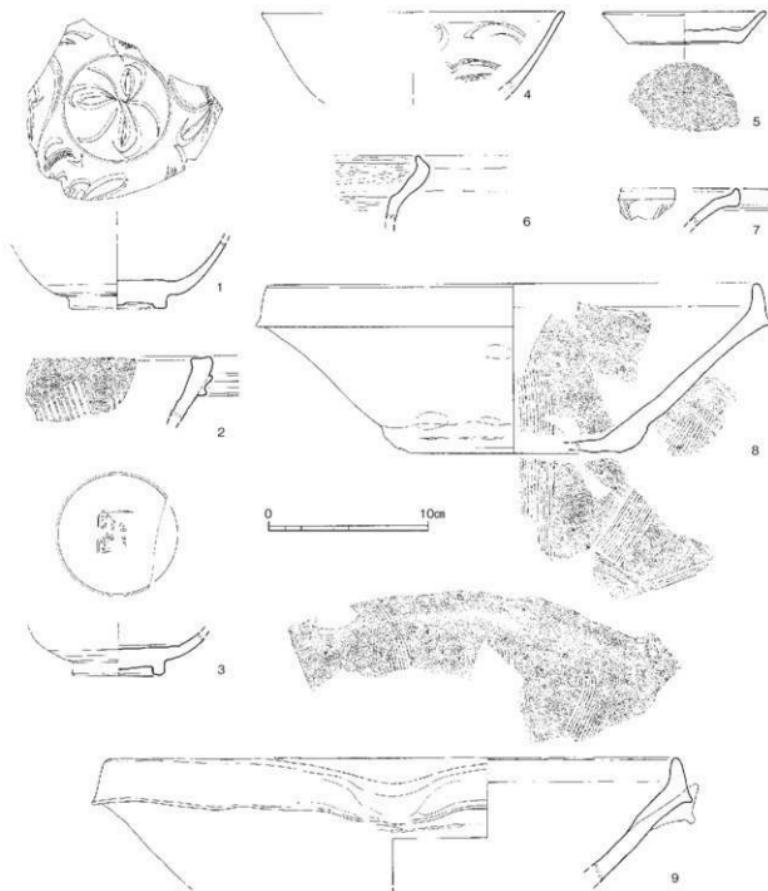
4~9は北に拡張したトレッチから出土したもので、4が拡張区東表層の黄褐色土から、その他はいずれも拡張区中層からの出土である。



第9図 石敷状遺構実測図(1/60)

4は龍泉窯系劃花文椀片で、胎土は灰白色。淡い灰青色の透明釉を掛けるが、隨所で灰黄色の斑点が浮いている。特に口縁部外面では連續的に変色している。

5は土器師小皿で口径10.2cm、器高2.0cmを測る。体部の立ち上がりはシャープで、底径は7.3cmである。外底面に回転糸切り痕が見え、内底面には横撫による凹凸が目立つ。6は瓦質鍋小片で、器表外面は灰黒色、器肉は灰白色となる。口端部が内側へ大きく摘まれている。7は口縁部が一旦外折し、端部を上方に摘む青磁杯小片。胎土は灰白色、釉は灰味強い青色に発色、厚く施釉される。体部内面に範描様の沈線が2本1単位で縱方向に刻まれるが、小片のために本来の単位はわからない。



第10図 出土遺物実測図1 (1Trとその周辺、1/3)

8・9は備前焼摺鉢である。8は同程度の大きさの残片が別にあるが同一個体と思われる所以図を略した。形状は不整といってよく、特に体部下端は器面の平滑化もできていない。口縁部は屈曲させて、屈曲部外面をつまみ出す。器肉は芯付近が灰赤褐色、器表に近い部分が暗灰色となり、内外面ともに器表が灰赤色となる。内底面及びその付近では整形時の横撫で痕がよく残っていて、ほとんど使用されていないようである。復元口径30.8cm、器高は10.6cmを測る。9は8に器形が似るが、器肉芯も暗褐色となる部分が多く、全体に焼成良好なようである。これも調整は難で、部分的に粘土紐接合痕が観察でき、口縁部外面の稜線も凹凸が多い。復元口径は36.0cmで、片口部が残存する。

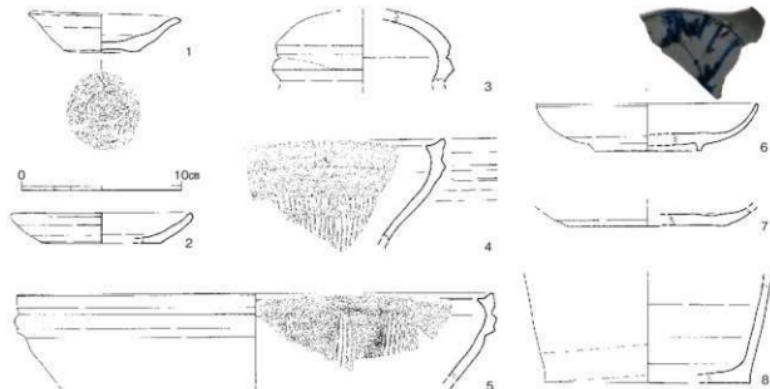
2Tr出土遺物（図版9、第11図・第16図）

1～3・5・6は2Tr最上層の黄褐色土から、4は2Tr東端の南隣に開けた小トレンチから、そして7・8はトレンチ西端の石敷状とした造構の礎間から出土したものである。

1・2は土師器小皿。1は肉厚で、底部は完存するが口縁部付近のほとんどを欠く。径4.8cmの底部から浅く大きく立ち上がり、口縁部付近で小さく外折する。口径は9.5cmに復元されるが歪んでいて、器高は2.1～2.6cmを測る。2は小片からの復元で底径7.6cm、口径11.5cm、器高は1.9cmとなる。残存する限りでは、底部から口縁部にかけて器肉の厚さが一様で、口端部は面をもつ。調整をみると、体部下端付近は横撫でがみられずあるいは型押しのような技法で作られたものか、それ以上には明瞭に横撫でが観察でき、中位に弱い稜があつて二段に施される。

3は陶器で最大径部をシャープな断面M字形に凹ませて、凹んだ部分に沈線を刻むようである。水差であろうか。体部中位まで不透明な白濁釉を厚く施す。器肉は灰色で、器表も露胎部は同様である。胎土は砂粒をほとんど含まない一様なものであるがザラザラしていて、器表も同様である。

4・5は高取焼の陶器摺鉢で、いずれも口端面が匙面状に凹み田村氏のいうII-1類に属する。器形がよく似るが、器表の色相が大きく異なり、法量に僅かな差がある。いずれも白色微砂粒を交えた緻密な胎土である。4は全体に赤味を帯びる灰褐色となり、胎土は灰黄褐色に近い。5は胎土が暗褐色となり、器表はくすんだ灰赤褐色となるが口縁部外面はより濃く発色する。



第11図 出土遺物実測図2 (2Trとその周辺、1/3)

6は染付皿である。口縁部は浅く内彎気味に終わり、高台は内面が直立、外面が内傾している。胎土は灰白色緻密、釉は白濁不透明釉で疊付以外は絶釉だが、わずかに残る口端部が暗褐色化していて露胎のようである。偶然か意図的なものかわからない。文様は見込だけにあって、濃青色の線を淡い灰青色で包むようにして草文を描いている。なお、見込には径2~3mmの釉が剥がれた目痕のような点が一辺5mm弱の距離を置いて三角形を描くように残る。また、整形時に刃物があたって器表がめぐくれたような状態の部分もある。復元口径14.0cm、高台径6.6cm、器高3.0cmである。

7・8は陶器。7は内面に灰緑色釉が薄くかかる、立ち上がり付近に黄白色釉で施す。外面は灰赤紫色となる露胎で、胎部下端から底部外周にかけて回転箝削りを施すが、底面中央は撫であるようである。皿であろうか。8は瓶類の底部片で、器肉は暗褐色で緻密さを欠く。内面は全面に施釉、体部下端は露胎となるが、施釉後に削ったものではない。また、外底面は露胎となる部分があって意図的なものとは思えないものの釉がかかる。釉は灰緑色、露胎部は茶褐色に発色する。

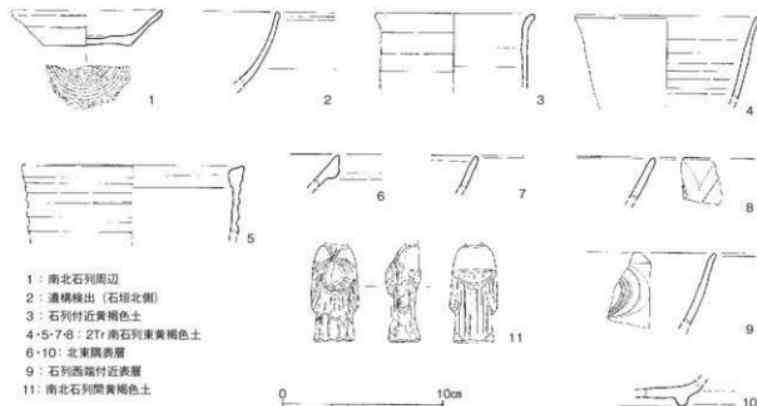
石列周辺黄褐色土層等出土遺物（図版9、第12図・第16図）

一部、黄褐色土層出土ではないものを含むが、表層から出土した遺物をまとめて紹介する。11は土師器、2~5・11は陶器、6~10は輸入磁器である。

1は胎土良好、作りも丁寧な土師器小皿で、体部は中位で緩く外反、口端部を揃むように仕上げる。復元口径9.4cm、同底径5.5cm、器高は2.2cmを測る。

2は椀であろう。体部から口縁部にかけて内側してそのまま丸く終わる。胎土は黒褐色のとても緻密なもので、全面に灰褐色釉が薄く掛かる。3は湯飲み形の椀で、これも胎土は灰色の緻密なもので、暗灰緑色釉が外面では薄く掛かり、内面では網目状となって厚く掛かる部分は黒色となる。4も湯飲み形の椀であろう。胎土は灰色緻密で、灰白色不透明釉を全面に付す。5は水差であろうか。端部を内側へ折り込んでいる。胎土は暗灰色で微砂粒を含み、露胎部は灰褐色となる。口縁部付近の外面と口端部付近に施釉して暗灰緑色に発色する。

6は白磁玉縁椀で、口縁部は断面三角形に近くなる。暗灰白色に発色するが、残存する小片では玉縁以下の外面は露胎である。7は白磁口禿皿の小片で白濁した釉が掛かる。8は龍泉窯系蓮弁文椀で灰黄色透明釉が掛かる。9は龍泉窯系割花文椀で、青味の強い透明釉が掛かっている。10は灰



第12図 出土遺物実測図3（石列周辺黄褐色土、1/3）

味の濃い青色の半透明釉が高台内・疊付の一部まで掛かっていて龍泉窯系青磁碗と思われる。体部下端付近に弱い稜線が入る。

11は型押の人形で頭部を欠くほかは完存する。右手に棒状のもの（杖か？）、左手に笠を持つ僧衣の人物で弘法大師であろうか。底面（足裏）で土質の違いが明らかとなっていて、前面・背面が別型であったことがわかる。

石組溝出土遺物（図版10、第13図）

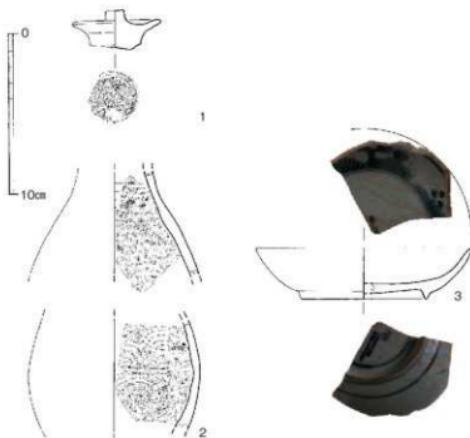
調査区南端の石組溝内から出土した遺物で、いずれも「疊層中」と注記があることから遺構埋没時に混入したものといえる。したがって、調査区外に由来するものである。

1は陶器蓋。胎土は暗灰色で白色・黒色微砂粒などを噛んでいる。底部には回転糸切痕がよく残っていてこの部分は露胎。その他の部位には暗茶褐色～灰黒色に発色する釉が薄く掛けられ、上面には灰緑色釉が斑点状に掛かる。2は瓶あるいは花生であろう。胎土は灰色で精良といつてよいが、破面にいくつかの空隙・火彫れがみられる。外面は全体に灰味帯びる半透明釉を掛け、内面では同心円文が残り部分的に茶褐色釉が垂れている。

3は染付。緩く内擣する口縁部がわずかに残存し、復元口径13.6cm、同底径8.0cm、器高3.2cmとなる。白濁釉の上に灰黒色・暗灰色といってよいような発色で松かと思われる文様を描き、見込中央にも植物文らしきを入れている。外面では高台基部とそのやや上方および高台内に合わせて3条の圓線を巡らせる。なお、疊付は削って仕上げるようでここのみが露胎である。

その他の出土土器（図版10、第14図）

1~4は調査区北東隅で南北に開けた3Eトレンチからの出土である。ここは表層に調査区南西付近ほど鮮やかなものではないもののやはり黄褐色土が0.1mほど堆積していて、そこから地山と思われる面まで0.15~0.35mほどの堆積があった。地山上は1Trと同様の暗灰褐色土であった。ここに示した土器はいずれも「灰黒色土」出土であるが、当該トレンチは土層をメモしていたが同様の記述はない。注記に「浅い」とあることから、表層の黄色系客土の下位にあるものであろう。いずれにしても造成時に埋没した遺物である。1は土師質の摺鉢片で、口縁部を内側に折り込んで断面三角形とする。内面にはわずかに摺目が残り、外面は被熱赤変する。2は陶器の小壺である胎土は暗灰色緻密なもので、やはり暗灰色の釉を掛けける。3も陶器で水差か。灰褐色～灰黒色の緻密



第13図 出土遺物実測図4（石組溝、1/3）

な胎土で、全面に黄味帯びる白濁釉を厚く掛けるが内面では多くが剥落している。4は文様が残らないが龍泉窯系青磁碗の小片である。灰青色透明釉が掛かる。

5Trは1Tr北拡張区の東、基壇状石列の南北辺に開けた小トレンチ。黄褐色土のみを除去したもので、遺物もそこからの出土である。5は復元口径9.0cm、器高2.2cmの土師器小皿で、底部と体部の境は明瞭でない。6は土師質の鍋で、器肉が灰赤色、器表外面は灰褐色、同内面は灰黄褐色となる。口縁部は外折し、内面では稜線を作るが対応する外面は指頭痕が多く曲線となる。外面は摩滅してはっきりしないが縦方向の粗い刷毛目で仕上げるようである。

7は基壇状石列南東端付近に開けたサブトレンチ出土の陶器碗。胎土は灰色の緻密なもので、ごく丁寧な横撫で調整がなされる。内外面に黄白色～灰黄色の施釉がなされたようであるが、ほとんどが剥落している。

8は石列北西隅付近から出土した陶器碗底部で、「2層」の注記があることから黄褐色土層の下位に属するのであろう。完周する底部片で、胎土に混入物はあまり見えないが器表ともに非常にザラザラとしている。残存する外面はすべて露胎、内面は灰褐色に発色する中に青味帯びて白濁する部分がある。

9～12は石列東側の「黄褐色土下」からの出土である。9は陶器で水差であろう。胎土は灰黒色を呈し、混入は少ないがざらついていて露胎となる口縁部付近の器表も同様である。口縁部は内外に肥厚させて、上面は水平な面をもつ。口縁部周辺の内外面が露胎で、灰褐色～灰茶褐色となり、内外面とも以下の施釉された部分は灰黄色と灰茶褐色がまだらに発色する。10は同安窯系青磁碗の小片。外面に櫛描文があり、釉は薄い青灰色透明である。11は染付小碗。胎土は純白で器肉が



第14図 出土遺物実測図5（その他の出土遺物、1/3）

薄い。口縁部はわずかに外反、その内面上端および外面彎曲部に圓線を巡らせる。文様は濃淡の鮮やかな青灰色で描く。小野分類の「染付碗C群」に比定できるのであれば15世紀前半台に位置付けられるものである。12はいわゆる碁笥底となる染付皿。胎土は黄白色陶器質で、釉は黄白色不透明。体部外面下端付近に圓線、内面見込付近にも圓線と文様があるが、発色不良である。

13・14は3ET南東近くの柱穴様のP6からの出土である。直径0.6mの平面円形を呈し、検出面から0.35mのところで地山中の巨岩が構造の半ばを占めていた。個別の出土状態は確認できていない。13は俵形の形状であるが、上下は閉じていない。図下端の接地面のみが釉を搔き取っており、ほかは全体に施釉され、灰緑色の地に白濁した部分が縱方向に不規則に流れている。体部側縁に3条、2条の幅広いしっかりとした刻線があるが、これも意図的にか整ったものではない。14は染付で、外底面に「福」を記して二重の方形枠で囲む。施文は体部外面に太いラインで唐草文と思われる文様、そして下端に細線でハート形のような文様を連続して描くほか、内面は無文である。胎土は純白で、高台疊付近の内外面の釉を削り落とすほかは總釉で、目痕も観察できない。

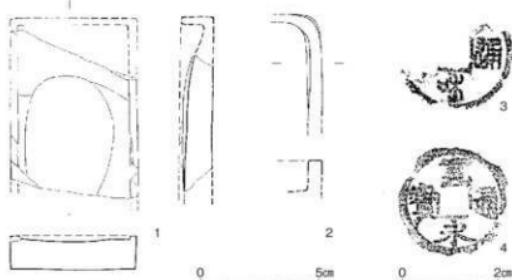
特殊遺物（図版10、第15～17図）

第15図1は小豆色のいわゆる赤間石製の硯で、海の大部分を欠く。調査区南東隅付近の4Tr出土であるが、この辺りは地山の礫層が浅くなり、覆土にも礫が多く含まれていて層位をはっきりと確認できていない。「表土」出土としてもよいという印象である。2はP6出土の石製品で、硯の縁であろう。灰黒色の緻密な石材を使用する。

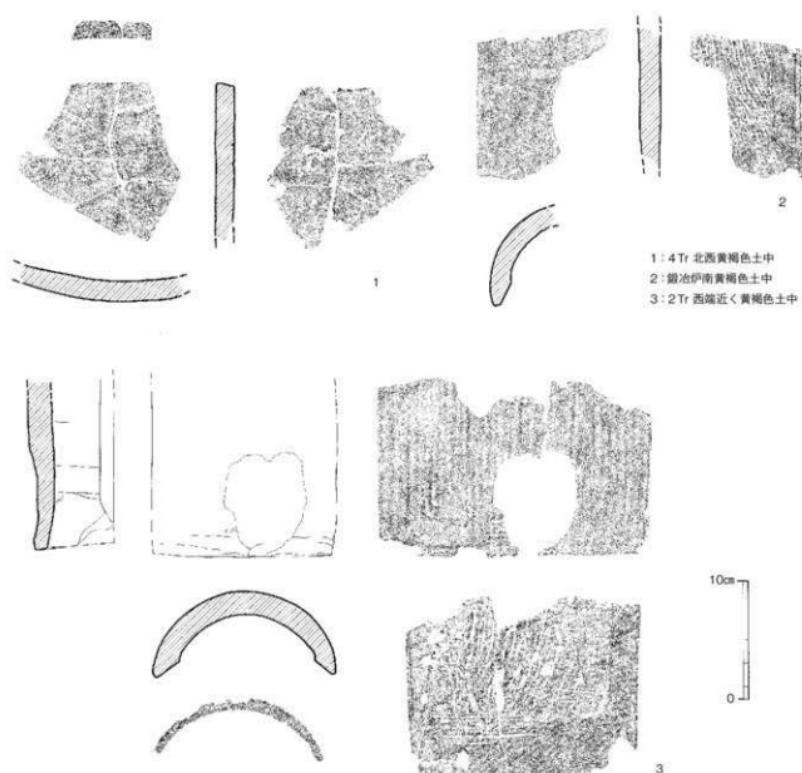
3は石列付近の黄褐色土から出土した銅錢。隸書体「政和通宝」（1111年初鋤）で、背面は無文。4は3Tr西の石列付近検出面から出土した寛永通宝で、確実に石列に伴うものではない。

第16図はいずれも壇瓦で、2・3はコビキBで作られたものである。1は4Tr北西黄褐色土出土の平瓦で、図上端の面は生きている。焼成が甘く、凸面は荒れていて、凹面では撫でと思われる痕跡が見えるが布目やコビキといった痕跡はない。2は石列南西張り出しの西端付近の黄褐色土から出土した丸瓦で、図下端付近は薄くなっているここも磨いている。凹面に側縁と直交する数条のシャープな細線があり、細かな布目痕と側縁に対して斜位となる薙を斬ったような圧痕が見える。側縁は範削りの後に磨きのような調整がなされ、凸面も丁寧に範磨きを施すようである（ここでいう範磨きは、「筑前鷹取城跡」報告書でいう「ヘラナデ」に相当するものであろう。）。これは焼成良好。3は2Tr西端近くの黄褐色土から出土した丸瓦で、左右側縁及び図下端が生きている。これも側縁に直交する無数の細線が残り、図下端を薄くしている、これには一部に削り痕が残る。凹面・凸面・側縁の様子は2と同じであるが、これは焼成が甘い。

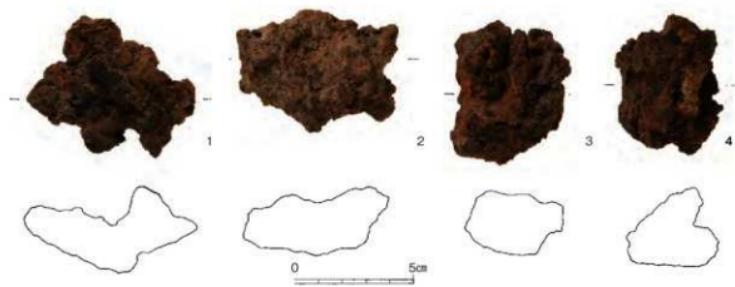
第17図は鉄滓である。1が2号、2～4が1号鍛冶炉出土である。磁石には反応しないが、重量感がある。炭小片を噛むものもあるが、いずれも茶褐色に錆びている。



第15図 出土遺物実測図6（硯・銅錢、1/3・1/1）



第16図 出土遺物実測図7(瓦, 1/3)



第17図 出土遺物実測図8(鐵滓, 1/2)

IV 終わりに

以上が今回の調査の内容である。以下で造成と石列、及び客土に含まれていた土器群について若干のまとめを行って終わりとしたい。

1 造成について

今回の調査では緩傾斜地に厚く客土を施して造成した痕跡が見られ、客土には多くの炭小片と長期間にわたる土器を交えていた。土器は同安窯系・龍泉窯系青磁碗や白磁口皿、染付など12世紀代から15～16世紀代に及ぶものがある。最上層の舗装・化粧のような効果をもつと思われる黄褐色土からは高取焼やコビキBの技法による丸瓦などが出土した。

山崎信二氏によれば、福岡市名島城で使われた瓦は日本で最も早くコビキBへ移行した例の一つであり、瓦製作技術の変化には天正19年（1591）の年代が与えられている。また、同氏によれば鷹取城ではコビキA・Bが出土していて、第4・5次調査（頂上平坦部・南口城門）出土瓦はコビキAの痕跡が残り、肥前名護屋城（天正19・20年築城）と同范の丸瓦があるという⁹。また、第3次調査（東口城門・西口城門）ではコビキBの瓦と橋文の鬼板などが出土しているが、報文中で橋文は黒田氏と関わりが深いとされていて、これは黒田氏が鷹取城を再興する1600年以降の年代を示すものであろう。コビキAの瓦や名護屋城同范軒瓦の経緯は不明だが、黒田氏の鷹取城築城に際して使用された瓦がこの遺跡の化粧土中から出土したことは、造成が黒田氏による鷹取城下の整備の一環として行われた可能性が考えられよう。

また、黄褐色土から出土した陶器は高取焼が主体である。高取焼は黒田氏の御用窯で、最古の窯は単近の永満寺宅間窯といわれている。今回出土したものがすべて宅間窯のものであれば年代が限定できるが、宅間窯の発掘調査では出土品が少なく筆者の能力も及ばない。内ヶ磯窯の発掘調査担当者によれば、今回の出土陶器は内ヶ磯窯の製品が主体であろうという。内ヶ磯窯の製品が主体であったとしても、内ヶ磯窯から鷹取城の破却までは1年ほどの期間があって、両者の位置関係や藩命による城下の整備であることから、最新の内ヶ磯窯の製品が出土することに不具合はない。

一方、第12図3の陶器について、精製品で白旗山窯の製品である可能性が指摘された。白旗山窯は鷹取城の破却後の寛永7年（1630）に開窯されていて、これが白旗山窯の製品であれば造成と鷹取城との関連性は乏しくなる。『筑前国続風土記拾遺』には「毛利氏退散」の後に「高鳥（鷹取）城主の居館」に永満寺を遷したとある。「毛利氏退散」の時期がはっきりしないが、『直方市史』年表では天正12年（1584）に毛利鎮実が禅寺を造営（異説併記）したという記事が記載されている。それはともかく、秀吉による九州出兵が天正14年7月、島津氏の降伏は翌年5月のこと、その後に筑前は小早川秀秋に与えられた。黒田氏が鷹取城を再興するのは1600年であり、いずれにしても「毛利氏の退散」は16世紀末のこととなる。その後に永満寺が移転したのであれば、この造成は永満寺の移転に関わるものであったことも考えられる。その場合は一国一城令にかかりなく、白旗山窯製品が持ち込まれることは十分ありうる。

造成地では南北約13m、東西方向は南辺で4.5m、北辺で2.8mほどが残存する石列を検出し、それは舗装あるいは化粧といった意味をもつと思われる鮮やかな黄褐色土の中に埋もれていた。南辺

で使用された石材は大型で比較的の形状が整っているが、それ以外は小振り・不整形であり、現状を見る限りでは数段を積み上げる一般的な基壇とは考えられない状況である。

黄褐色土が調査区東半であまり見られず、石列も失われていることは削平（開墾）によって除去されたものと考えられる。調査区北東隅付近ではなお黄褐色土が若干残存するが、石列は認められなかった。この付近の黄褐色土は南西付近のそれに比べれば色相や土質が明らかに異なっていて何らかの改変を受けたものと思われる。ただ、調査区はほぼ水平に掘削しているので、石列の東側が削平によって失われたものとすれば、そこでは石列の基底部がより高い位置に据えられていたことになる。西辺石列が本来的に一段であったとすれば、表面に置かれた黄褐色土が勾配をもって客土されていたこととなり、造成の意図がわからない。何より、検出時の石列は黄褐色土に埋もれていて見えない状態であり、それでは石列の意味がわからない。1m近い客土を行い、なお地表を化粧土で覆うといった大規模な土木作業を行う理由は屋敷地を造成したのであろうし、大小の石材を並べたことの意味もやはり区画を兼ねた基壇の構築を意図したものであろう。そうであれば地形的に低い西辺はやはり数段を積み上げていたと考えられる。石材の大きさから見てそれだけで自立できるものではないことから、客土を利用して安定させたものと思われる。

あるいは、造成途中で放棄されたという考え方もあるであろう。造成の意味や石列の構造などについて、今後の周辺の調査に期待したい。

2. 中世の出土遺物について

今回の調査では小炭を多く交えた厚い客土中から龍泉窯系青磁碗や中世後期の備前焼などが出土した。「位置と環境」で引用した長暦3年（1039）の鷹取城築城についての信憑性は如何ともしがたいが、山頂で行われた発掘調査ではC区としたところから白磁口禿皿片が出土していて、山頂での活動が14世紀代まで遡る可能性がある。また「上野川の沢筋、元営林署の小屋付近」では「同安窯の白磁が1点」採集されているといい、これが山城に関連するものであれば12世紀まで遡り、「永承元年（1046）に鷹取に染城」という記録にさらに近づくこととなる。

しかし、今回の調査で出土した中世前期の遺物に関しては永満寺経塚との関連を考えるべきであろう。先に引用した『筑前国続風土記拾遺』によれば、「永満寺址」は「本堂というところ」にあって今「貴船社」があるといい、さらに、貴船社の「西1町あまり」の「石壁」は「高島（中略）城主の居館」か、と記されている。今回の調査区の東約250mに貴船神社があり、西100m弱の位置に「母里太兵衛屋敷跡」の看板が立てられた蔓草で覆われた石垣があって、これが「高島城主の居館か」と記録されたものであろう。「本堂」の地名が永満寺の文字通りの本堂のあったことを示すのであれば、今回の調査地はその境内地あるいは隣接地であったものと思われる。17世紀初めの造成にあたって、土取り場とした土地がかかっての「永満寺」の一角であったのであろう。

この調査では、幻の永満寺に触れることができているのかも知れないが、それもまた今後の課題である。

註

田村悟「考察」（直方市教育委員会「須崎町公園遺跡」（『直方市文化財調査報告書』第18集、1995所取）

山崎信二「近世福岡の瓦」（『近世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報 第78刷、2008）

直方市教育委員会「筑前高取城跡」I～V（『直方市文化財調査報告書』第8～12集、1987～91）

図 版

図版 1



1. 鷹取城跡上空から西麓を見る
(東から)



2. 遺跡遠景
(北西上空から)



3. 遺跡遠景
(西上空から)

図版2



1. 遺跡全景
(上空から)



2. 1Tr. 東壁
(南西から)



3. 1Tr. 北拡張区東壁
(北西から)

図版3



1. 2Tr.南壁
(北東から)



2. 調査区全景
(東から)



3. 石列全景
(北から)

図版 4





1. 石列西辺と黄褐色土
(北から)



2. 3ETr.西壁
(北東から)



3. 石組溝と石列南辺
(西から)

図版 6





1. 石列南西隅の張り出しと鍛冶炉
(東から)



2. 鍛冶炉
(南西から)



3. 鍛冶炉完掘後
(北東から)

図版 8



1. 土坑
(北から)

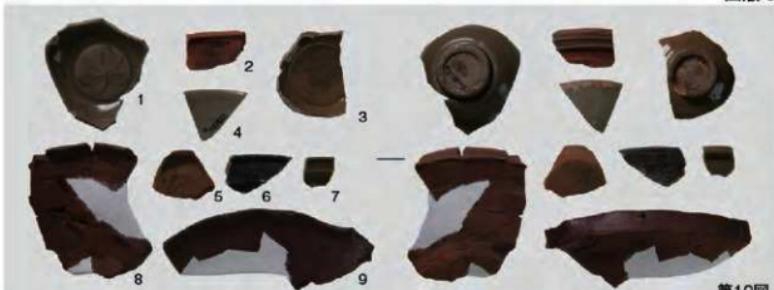


2. 土坑完掘後
(北から)

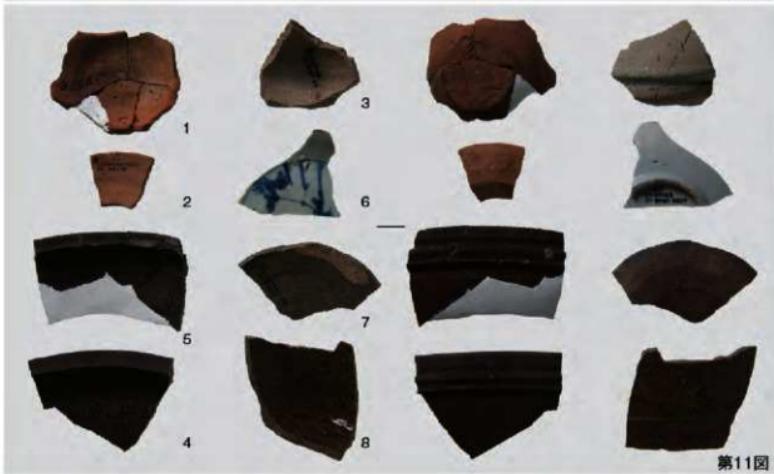


3. 石敷状遺構
(北東から)

図版 9



第10図



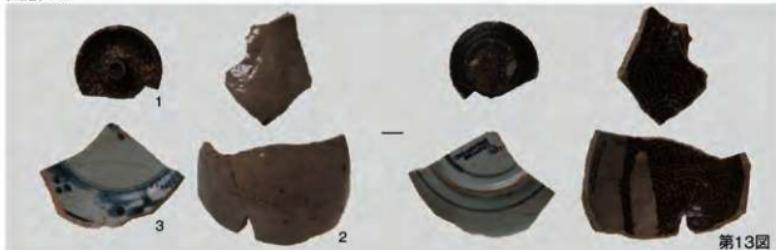
第11図



第12図

出土遺物 1

図版 10



第13図



第14図



第15図



第16図

出土遺物2

報告書抄録

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2117104
登録年度 25	登録番号 14

永満寺桜馬場遺跡

-福岡県直方市大字永満寺所在遺跡の調査-

福岡県文化財調査報告書 第247集

平成26年3月31日

発行 九州歴史資料館

〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3

印刷 株式会社インテックス福岡

〒812-0892 福岡市博多区東郷町1丁目15番1号